

私は衰え、あの方は盛んに

ヨハネの福音書 3章 22-30節

はじめに

今日の聖書箇所には、イエス様が人々にバプテスマ（洗礼）を授けていたことを巡ってなされた、バプテスマのヨハネとその弟子たちとの対話が書かれています。バプテスマのヨハネは、24節にあるように、後にヘロデ王によって投獄されます。そして、首をはねられ、殺されてしまうのです（マルコ 6：17-29）。バプテスマのヨハネは、イエス様を証しするために、神様に遣わされた人でした（ヨハネ 1：6-7）。今日の聖書箇所には、バプテスマのヨハネのイエス様に対する最後の証しが書かれています。

1. バプテスマを授けておられたイエス

22節を見ると、イエス様は、ユダヤの地に滞在して、人々にバプテスマ（洗礼）を授けておられました。当時、バプテスマは、異邦人がユダヤ教に改宗する時に授けられるものだったようです。異邦人の汚れを水できよめるためです。しかしバプテスマのヨハネは、それまで異邦人に授けられていたバプテスマを、ユダヤ人に授けるようになりました。彼のバプテスマは、ユダヤ人に罪の悔い改めを求めるバプテスマでした。彼は、ユダヤ人に悔い改めのバプテスマを受け、メシア（キリスト）が来られる前の道備えをしたのです。

ヨハネがバプテスマを授けている所に、イエス様も来られ、ヨハネからバプテスマを受けられました。そしてその時、御霊（聖霊）が鳩のようにイエス様の上にとどまり、ヨハネは、「**その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である**」という言葉聞いたのです（ヨハネ 1：32-33）。

ユダヤ人に対するバプテスマは、ヨハネが始めたことでした。しかしヨハネからバプテスマを受けたイエス様も、ユダヤ人に対してバプテスマを授けるようになったのです。しかも 4：1-2 を見ると、イエス様はヨハネよりも多くの弟子を作ってバプテスマを授けるようになり、イエス様ご自身だけでなく、弟子たちもバプテスマを授けるようになっていたほどでした。

ヨハネは、水でバプテスマを授ける人でしたが、イエス様は聖霊によってバプテスマを授ける方でした。バプテスマは、洗礼のことですが、洗礼で用いられる水は、御霊、つまり聖霊を表します。イエス様は、「**人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません**」（ヨハネ 3：5）と言われました。私たちは洗礼を受け、水を注がれることによって、御霊、つまり聖霊を注がれたことを覚えるのです。洗礼を受けた私たちの内には、確

かに聖霊がおられ、私たちを導いてくださっているのです。

イエス様が人々に実際に聖霊を注がれるのは、十字架と復活、そして昇天を経た後のペンテコステの時です。ですからイエス様が今日の聖書箇所を受けていたバプテスマは、聖霊を約束する水のバプテスマであったと考えられます。

いずれにしても、今日の聖書箇所で分かることは、ヨハネとイエス様が同じ時期に、それぞれが人々にバプテスマを受けていたということです。イエス様は「ユダヤの地」で、ヨハネは「**サリムに近いアイノン**」で。おそらく二人がバプテスマを受けていた場所は、それほど遠くはなかったと考えられます。

2. ヨハネの弟子たちの妬み

そのような状況の中で、ヨハネの弟子の何人かが、ヨハネのところに来てこう言います。「**先生。ヨルダンの川向こうで先生と一緒にいて、先生が証しされたあの方が、なんと、バプテスマを受けておられます。そして、皆があの方のほうに行っています**」。ヨハネの弟子たちは、多くの人々が、イエス様のほうにバプテスマを受けに行くのを知って、妬みを覚えたのです。先ほどの4：1によれば、イエス様はこの時、ヨハネよりも多くの弟子を作ってバプテスマを受けていたようです。25節を見ると、ヨハネの弟子たちは、あるユダヤ人ときよめについて論争をしていたとありますが、おそらくそのユダヤ人から、イエス様が最近バプテスマを受け始めたらしい、しかも皆がイエス様のほうに行っているという噂を聞いたのでしょう。

ヨハネよりも、イエス様のほうに人々はバプテスマを受けに行っている、その状況にヨハネの弟子たちは心穏やかではないのです。しかもヨハネの弟子のうち二人は、すでにイエス様について行くようになり、イエス様の弟子となっていたのです。そのうちの一人は、ペテロの兄弟アンデレでした（ヨハネ1：40）。

ヨハネがバプテスマを受け始めた頃、各地から多くの人々がやって来て、ヨハネからバプテスマを受けたのです。しかしイエス様が現れ、イエス様がバプテスマを受け始めると、人々はヨハネよりもイエス様のほうに集まり、イエス様からバプテスマを受け、イエス様の弟子となっていったのです。

ヨハネの弟子たちは、イエス様を見たことがあります。そしてヨハネがイエス様のことを、「**私にまさる方**」「**私には履き物のひもを解く値打ちもない**」「**世の罪を取り除く神の子羊**」「**聖霊によってバプテスマを授ける方**」「**この方が神の子である**」という証しを聞いていたのです。28節でも、ヨハネが「『私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです』とわたしが言ったことは、あなたがた自身が証ししてくれます」と言っている通り、ヨハネの弟子たちは、ヨハネから「私はキリストではない」むしろ「あの方こそキリストである」と散々聞いているのです。それなのに、ヨハネの弟子たちは、ヨハネよりもイエス様のほうに人々が集まっていることに不満を感じていたのです。

3. 私は衰え、あの方は盛んに

ではヨハネ本人は、この状況をどのように思っていたのでしょうか。27 節でヨハネはこう言います。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることができません」。ヨハネは、人は皆、天から与えられているものがあると言うのです。つまり人は皆、それぞれに神様から、賜物と役割が与えられているということでしょう。人は、その神様の御心や召命を越えて何かを受けることはできないということだと思います。使徒パウロも、こう言いました。「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を越えて思い上がってはけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい」(ローマ 12:3)。私たち一人ひとりには、神様によって与えられた恵み、信仰の量りがあると言うのです。それぞれに神様から与えられた役割と召命があるということです。ですから私たちは、人と比べてもしょうがないのです。人と比べて劣等感を持ったり、優越感を持ったりする必要はないのです。大切なのは、自分に与えられた神様からの恵み、役割と召命に忠実に生きるということです。

イエス様の弟子のペテロは、イエス様に「あなたは若いときには、自分で帯をして、自分の望むところを歩きました。しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます」(ヨハネ 21:18)と言われました。これは、ペテロがどのような死に方で神様の栄光を現すかを示されたイエス様の言葉でした。それに対してペテロは、他の弟子を見て、「主よ、この人はどうなのですか」と言います。するとイエス様は、こう言われます。「わたしが来るときまで彼が生きるように、わたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい」(ヨハネ 21:22)。私たちは、他の人と比べる必要はないのです。他の人の生き方は、私たちには何の関わりもないのです。大切なのは、神様から与えられた自分の役割と召命に、不平不満を言わず、覚悟を決めて「従っていく」ことなのです。

ヨハネはまた 29 節でこう言います。「花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています」。ヨハネは、花嫁と花婿の譬えを通して、自分が何者であることを説明します。聖書の中では、神様と神様を信じる人々を、花婿と花嫁の関係でよく表現されます。ここでの「花嫁」はイエス様を信じる人々で、「花婿」はイエス様です。そして、「花婿」の「友人」がヨハネです。ヨハネは自分のことを、花婿の友人と自覚しているのです。つまり自分は花婿ではないと自覚しているのです。

花嫁を迎えるのは花婿です。花嫁と花婿が結ばれることが結婚式です。それが最も喜ばしいことです。もし花嫁と花婿の友人が結ばれてしまったら、その結婚式は台無しです。花婿の友人の役割は、花嫁と花婿が結ばれる準備と手伝いをすることです。花婿の友人は脇役で、あくまでも主役は花嫁と花婿です。花婿の友人の喜びは、自分が花嫁と結ばれることではなく、花婿と花嫁が結ばれることです。

ヨハネは、人々とイエス様が結ばれる準備と手伝いをする役割を与えられた人でした。

ヨハネが望んだことは、人々と自分が結ばれることではありませんでした。ヨハネが望んだことは、人々とイエス様が結ばれることでした。それこそがヨハネの喜びでした。ですからヨハネは、30節でこう言います。「**あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません**」。「盛んになる」という言葉は、「増える」という意味の言葉で、「衰える」という言葉は、「減る」という意味の言葉が使われています。ヨハネが求めたことは、自分のもとにいる人々が減って、イエス様のもとに集まる人々が増えることでした。ヨハネは自分が繁栄することよりも、イエス様の繁栄を願ったのです。つまりヨハネは、自分のことよりも、イエス様のことを思ったのです。自分か、イエス様かの選択の中で、ヨハネは喜んでイエス様を選び取ったのです。

おわりに

私たちは、今日の聖書箇所から神様に何が求められているのでしょうか。二つのことが求められていると思います。一つは、私たちがキリストの「花嫁」となるということです。ヨハネの弟子たちは、ヨハネからイエス様の証しを散々聞いていました。しかしそれでも彼らは、イエス様の繁栄よりもヨハネの繁栄を願ったのです。彼らがしようとしたことは、花婿と結ばれるのではなく、花婿の友人と結ばれようとしたことです。私たち一人ひとり、しっかりと花婿であるイエス様と結ばれなければなりません。イエス様との関係を深めなければなりません。誰か目に見える人に頼るのではなく、真の神であり、救い主であるイエス様に頼らなければなりません。

もう一つ私たちが神様から求められていることは、キリストの「友人」となるということです。キリストの友人とは、イエス様の語ることに耳を傾け、イエス様の声を聞いて大いに喜び、イエス様を証しする人です。そして、人々とイエス様を結びつけ、それを喜びとする人です。

イエス様は、こう言われました。「**人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。わたしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのかを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです**」(ヨハネ 15:13-15)。イエス様は、私たちの罪のために十字架でいのちを捨てられ、私たちの「友人」となってくださいました。イエス様の御言葉を聞き、それに従うなら、イエス様は私たちを「友人」と呼んでくださいます。

イエス様は、私たちが盛んになるために、ご自身が衰えてくださいました。それが、私たちの「友人」としてのイエス様の十字架の死です。今度は、私たちがイエス様の「友人」となっていかなければなりません。イエス様の友人は、イエス様の御言葉によく耳を傾け、それを大いに喜びます。そして、イエス様を証しし、人々を自分にではなく、イエス様に結びつけます。そして時には、イエス様のためにいのちを捨てます。本当の友人は、自分のことよりも、友人のことを考え、友人が盛んになることを心から願うのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの生まれながらの性質は、自己中心で、自分のことばかりを考えます。しかし神様は、私たち一人ひとりに役割と召命を与えてくださっています。私たちがまず、イエス様の花嫁となることができますように。目に見える人やモノではなく、イエス様ご自身に頼っていくことができますように。また私たちを「友人」と呼んでくださるイエス様の本当の「友人」に私たちもなっていくことができますように。自分のことではなく、イエス様が盛んになることを喜びとできますように。たとえ自分が衰えたとしても、イエス様の「友人」であることを喜べますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。